

令和2年度

教養ゼミ（初年次教育科目）

実施状況報告書



福山大学

FUKUYAMA UNIVERSITY

目 次

.....

経済学部 経済学科 1

.....

経済学部 国際経済学科 2

.....

経済学部 税務会計学科 3

.....

人間文化学部 人間文化学科 4

.....

人間文化学部 心理学科 5

.....

人間文化学部 メディア・映像学科 6

.....

工学部 スマートシステム学科 7

.....

工学部 建築学科 8

.....

工学部 情報工学科 9

.....

工学部 機械システム工学科 10

.....

生命工学部 生物工学科 18

.....

生命工学部 生命栄養科学科 20

.....

生命工学部 海洋生物科学科 22

.....

薬学部 24

.....

経済学部 経済学科

■ 担当者氏名

(代表) 田中征史

吉田卓史、三川敦、石丸敬二、平田宏二、李森、早川達二、中村和裕

■ ゼミ数, ゼミの学生数

令和2年度新入生186名を学生番号順に7クラスに分割した。1クラスあたり26, 27名であった。

■ 実施内容

昨年度に引き続き、新入生全体に対して共通するガイダンス等は全クラス合同で行い、それ以外はクラス担任別で学習指導やゼミ活動を実施した。今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う遠隔授業の導入に伴い、全ての授業回で遠隔授業を実施した。昨年度と同様、大学生活へのオリエンテーション(学び、目標)、本の読み方、講義の取り組み方、図書館の利用方法、履修指導、コースの説明、ビジネス能力検定試験対策講座などは全てのクラス合同で実施した。今年度からの取り組みとして、レポートの書き方に関する講座を導入し、レポート作成の基礎的な知識を教え、課題として提出されたレポートは学科教員で採点を分担し、丁寧なフィードバックを行った。

■ 教養ゼミの特徴

初年次教育として「教養ゼミ」は、高校から大学への学習環境をスムーズに移行するための学習スキルを身につけて学習意欲の向上にも効果を挙げている。円滑な大学生活を送るために必要な知識や情報を得ることを重視する。また、大学生活を通じて資格取得を促進させる目的で、ビジネス能力検定試験の対策講座を教養ゼミ内で実施した。また、レポート作成の演習により、基礎的なライティングスキルの向上を測った。

■ 成果

令和2年度経済学科で実施した教養ゼミの代表的な成果は、以下のとおりである。

- ・ ビジネス能力検定3級に約6割、2級に約4割の学生が合格した(昨年度とほぼ同じ合格率)
- ・ 図書館や他の大学施設に利用方法について学ぶ機会となった
- ・ オンライン授業によりレポート演習の実施などは、これまでの対面授業よりも学習成果が高かった

■ 課題

担当教員からは教養ゼミの課題として以下のような意見があった。

- ・ 対面授業が実施できなかったため、学生同士のコミュニケーションの機会が著しく減少した(教員や学生からの反対もあり、クラス担任別実施回でも対面でのゼミ活動が行えなかった)
- ・ 授業の出席者の割合が昨年度(対面実施)に比べて大幅に減少した
- ・ 新型コロナ感染拡大による大学授業への影響から、教養ゼミにおける1クラスあたり学生数を減らす試みがこれまで以上に必要である(これを踏まえ、R3からは教養ゼミを15クラスに分割し、1クラスあたりの学生数を11名に減少させた)

経済学部 国際経済学科

■ 担当者氏名

(代表)藤本浩由、ビセット・イアン・ジェームス

■ ゼミの学生数

54名（うち留学生12名）

■ 実施内容

- ・大学における学修の方法(図書館の利用法等)
- ・プレゼンテーションの仕方やプレゼンテーション資料作成方法
- ・コロナの影響で、遠隔授業・学内のITシステム仕方
- ・ビジネス能力試験の準備
- ・コロナと経済の関係

■ 教養ゼミの成果等

- ・プレゼンテーションの仕方やプレゼンテーション資料作成方法を学修した
- ・コロナと経済の関係を学修した

■ 問題点、改善点及び対応策

- ・Covidのために、学生と学校の間に距離がありました。
- ・特に、オリエンテーションの欠如は、学生が大学生活に慣れるのを遅らせ多くの問題を引き起こしました。

経済学部 税務会計学科

■ 担当者氏名

(代表)堀田彩、小林正和、白木康晴、許霽

■ ゼミ数, ゼミの学生数

35名

■ 教養ゼミの特徴

- ・ 授業の実施とともに、4人の担任や教務委員による学生へのきめ細かい指導とサポートを行う点

■ 授業のねらい

学生の学力・能力の向上のための基盤を、以下により構築する。

- ・ 教員ならびに学生間の交流を深め、大学とのつながりを作る。
- ・ 安全に安心して学校生活を送れるようにサポートする。
- ・ 大学における学修への動機付けを高める。
- ・ 資格取得にチャレンジし、各自が自信を持てるようにする。

■ 実施内容

- ・ 大学における学修方法の指導(履修指導、講義の受け方、セレッソの使い方など)
- ・ 大学生活に関するオリエンテーション(学生課、教務課、就職課、健康管理センターなどの紹介)
- ・ 図書館ならびに図書館ホームページの利用方法の紹介(データベースへのアクセス方法など)
- ・ 税務会計学科の紹介(教員、授業、コースなど)
- ・ 自己紹介やグループディスカッションによる交流促進
- ・ 大学生活で起こりがちなトラブルに関する注意喚起(詐欺、勧誘、デートDVなどの被害防止)
- ・ 学生生活上の困りごととその解決について考えるグループワークとプレゼンテーションの実施
- ・ コミュニケーション・スキルの向上のための訓練(傾聴とディスカッションの実践)
- ・ ビジネス能力検定対策講座の実施
- ・ 個人面談の実施(前後期2回実施)

■ 成果

- ・ 入学式・オリエンテーション以降、登校ができない中で、学生の不安や困っていることに対応できた。
- ・ 遠隔授業の中、著しい単位取得不足、成績不良に陥る者が出なかった。
- ・ ビジネス能力検定を積極的に受検し、複数の学生は2, 3級同時合格を果たした。
- ・ 入学当初からのコロナ禍という大変な状況に、前向きな姿勢と学生同士の協力により概ね適応した。

■ 課題

- ・ 授業において、授業担当教員以外の教員の参加が計画されなかった点
(入学当初、学科教員全員の自己紹介を行ったものの、その後のゼミでの関わりがなく、1年次終了時点で、学科教員を記憶していない学生が多いことが判明した。学生が学科教員を認識しておくことは、2年次後期のゼミ選択を円滑にするものであると考えられる。また、学生と教員とのコミュニケーションや所属意識にも影響すると思われる。)

人間文化学部 人間文化学科

■ 担当者氏名

(代表) 重迫 隆司

■ ゼミ数, ゼミの学生数

全1年次生 50名

■ 授業のねらい

- (1)1年生全員が教員全員と顔を合わせる。
- (2)学生全員がお互いに交流を深める。
- (3)大学における「学び」について学び、学修への動機付けを高める。

■ 学修の到達目標

大学生として必要なコミュニケーション能力の基礎となる力を身につける。

*コミュニケーション能力の基礎となる力:聴く力、話題に参加する力、質問する力、自分の言葉で自信を持って発表(プレゼンテーション)する力など。

■ 実施内容

※新型コロナの影響で、すべてオンライン授業(セレッソ)とした。グループによっては対面授業も適宜実施。

※共通調査テーマ:「病」

- | | | |
|------------|---|--|
| 第1回(5/7) | } | 共通テーマについて、各自調査して教員に報告。〈全教員〉 |
| 第2回(5/9) | | |
| 第3回(5/14) | } | 教員のコメントをもとに調査を深化。〈全教員〉 |
| 第4回(5/21) | | |
| 第5回(5/28) | } | グループの調査テーマについて、各グループ内で検討・決定。〈全教員〉 |
| 第6回(6/4) | | |
| 第7回(6/11) | | |
| 第8回(6/18) | } | 各グループのテーマに沿って各自調査・報告。〈全教員〉 |
| 第9回(6/25) | | |
| 第10回(7/2) | | |
| 第11回(7/9) | } | 教員のコメントをもとに調査を深化。〈全教員〉 |
| 第12回(7/16) | | |
| 第13回(7/30) | } | 自グループ以外の報告を読んで、それぞれに対して考えたことをまとめる&提出。〈全教員〉 |
| 第14回(8/6) | | |
| 第15回(8/20) | | |

■ 教養ゼミの成果

セレッソ上での学生の議論やコメント、各課題の内容から、全員が到達目標に達したことを、学生・教員ともに確認した。

■ 問題点, 改善点, 対応策

前年度の反省を活かして、共通テーマを設定し、全体発表の方法を統一したが、コロナ禍によって改善内容を十分に反映させることができなかった。次年度は遠隔授業も想定したうえでの準備を進めたい。

人間文化学部 心理学科

■ 担当者氏名

赤澤 淳子, 枝廣 和憲, 武田 知也, 山崎 理央

■ ゼミ数, ゼミの学生数

ゼミ数4, 各ゼミに15~16名の1年生が所属した。

■ 実施内容

前期

①ピア・サポート訓練(1)(教員)

主な内容: 松田学長からの特別講義

②レポート作成を学ぶ(教員+SA)

参考文献の探し方, 引用文献の書き方, レポートの構成などをテキストに基づいて学び, 各自が心理学に関わるテーマを見つけて, レポートの書き方を実習した。

③ 新入生歓迎会(2年生主催)→コロナのため中止

④その他(図書館案内を実施)

後期

①ピア・サポート訓練(教員+SA)

主な内容: ピア・サポートとは(自分自身を知ろう, コミュニケーション), 傾聴について(聴き方のロールプレイ, 話し合ってみよう), ストレスへの対処

②プロブレム・ベースド・ラーニング(PBL)(教員+SA)

7~8名のスモールグループで, 「大学生活での気になる出来事」についてのプリントを基に, 話し合いを通して課題を見つけ, その解決方法までをまとめた。最後に全体で各グループの発表を実施した。

③ピリオバル: グループで図書を一冊用意し, それについて, スライドを用いて発表した。

④その他(学生相談室案内およびメンタルヘルスについての講義(講師: 松本先生)を実施)

■ 教養ゼミの成果

【授業全般】

前期は, 第1回~第5回は1年次生全員を対象に, 松田学長による特別講義(「ピア・サポート」という概念の紹介と必要性についての説明)が実施された。コロナ禍の状況を受け, テキストに基づいて, 論文作成の基礎を学んだ。図書館で各自のテーマに関わる参考文献を探し, 引用文献の書き方に基づいて, レポートを作成することができた。

後期は, ピア・サポート訓練では, 心理学科教員と3, 4年生のSAが「ピア・サポートをはじめよう」をテキストに, 学生同士がサポートしあうためのスキル(傾聴の基本スキルや質問・伝達スキル)の訓練を行なった。ロールプレイや話し合いを中心とした授業に出席することで, 傾聴やサポートの重要性を経験し, 互いに支えあう関係を築くことができた。また, ②PBLではスモールグループディスカッションや発表等の活動を通して, グループでの役割, 課題を見つけるところから発表までのプロセスを学び, グループ・ディスカッション・スキルを修得することができた。「学生相談室案内」を通してメンタルヘルスの重要さと, 心理学で学んだことを活かすことについて知ることができた。

【上級生からのサポート】

3年生, 4年生: ①ピア・サポート訓練では, 通常であれば, 学生サポーター養成講座のメンバーが3~4名ほどでグループを形成し, 各教養ゼミに配属されるが, コロナ禍のため, 代わりに, 教員とSAで1年生に対するピア・サポート訓練を実施した。また, PBLでは, 各ゼミに1名のSAが配置され, グループワークのサポートをした。後期は図書館で参考文献を探す手助け, 引用文献の書き方などについて個別にサポートをした。

このような上級生がサポーターとして授業に参加することで, 1年生のピア・サポート訓練の効果が上がり, グループワークがスムーズに進むなど, 学年を越えた交流が促進された。

■ 今後の課題

コロナ禍でのグループ形成や授業等へのモチベーション維持等が課題となった。

2年次の実験実習及びリサーチ実習のレポート作成に活用できるスキルの学習課題を検討する。

■ 特記事項

今年度も, 心理学科教員が作成した冊子(ピア・サポート訓練のテキスト)を1年生に配付した。

例年, 新入生合宿オリエンテーションでは学生サポーター養成講座の学生が考案したプログラムを実施するが, 急遽コロナ禍で中止となった。

初のコロナ禍での新入生であり, 対応が非常に難しい年度であった。

人間文化学部 メディア・映像学科

■ 担当者氏名

(代表): 渡辺浩司

■ ゼミ数, ゼミの学生数

ゼミ数: 3(一年次担任: 筒本、渡辺、丸山)

ゼミの学生数: 14 名程度

■ 前期実施内容

- 履修登録など教務関係のガイダンス
- Zoom や Zelkova、Cerezo 等、遠隔講義に対応するためのガイダンス
- 少人数ゼミ(大学での学びについて、ゼミ学生の交流、SNS の活用について、等)
- 学期末には、全員で一つのルームに集合しオンライン授業期間を乗り切った感想を互いに伝え合い、全員で互いに拍手を送って記念撮影をした
- SPI の過去問に取り組んだり、「私のトリセツ」を作成したりするなど、将来設計を考えるための準備作業の方途を伝えた

■ 後期実施内容

- 対面形式やオンライン形式を織り交ぜながら、定期的に個人面談を実施し、受講態度や課題への取り組み方などを指導した
- 学期末には、全員で一つのルームに集合しクリスマスソングを BGM に、担任教員3名からオンライン授業を1年間乗り切ったことを称えるメッセージを伝えるとともに、全員で互いに拍手を送った

■ 前期教養ゼミの成果等

受講者の将来の夢や目標を実現するために本学科で何を学ぶかを明確にする、学科に関係する職業と学科の教育目標の関係が説明できるようになるという点はおおよそ達成できた。

新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言が発令されたため、オンライン形式での実施が主となったが、少人数ゼミの実施回数を増やし学生と教員との交流や学生間での交流の機会を設けることで、孤独感や孤立感を緩和し、共に学修する仲間がいることを意識させるようにしたことで、文献購読や資料調査など、一つ一つの課題に取り組む力が身についたように思われる。

■ 問題点, 改善点

横のつながりはもちろんのこと、上級生との縦のつながりを作るための時間やプログラムを準備できなかった。しかしながら、2021 年度の交流プログラムに2年生を組み込むことで、1年越しにこれを実現した。

工学部 スマートシステム学科

■ 担当者氏名

代表: 伍賀 正典

宮内 克之、三谷 康夫、仲嶋 一、田中 聡、香川 直己、関田 隆一、菅原 聡、沖 俊任、伍賀 正典

■ 実施内容

1 回目(5/11) 数学到達度テスト

2 回目(5/18) 自己紹介

3 回目(5/25) 授業の受け方、ノートの取り方

4~7 回目(6/1、6/8、6/15、6/20) 小グループゼミ

8~15 回目(5/27、6/3、6/10、6/17、6/24、7/1、7/8、7/22) グループワーク

■ 教養ゼミの成果等

- 初回では数学の習熟度をみるための試験を実施した。
- 2回目では大学と学科についての説明の後、各自が自己紹介の方法を説明した。
- 3回目では、基礎的なスキルとしてのノートの取り方や授業の受け方について指導した。
- 4~7 回目では、初回で実施した数学テストの結果から小グループに分けた。この小グループでゼミを行い数学基礎などの学力底上げを行った。
- 8~15回目まで、グループワークとして4班に分かれて協働作業を行った。各班のテーマは、レスコンシーズのイベント実施、ET ロボコンへの参加、ドローンの操作、電子工作である。ブレインストーミングや線表を用いたスケジュール、グループでの協調作業を経験した。
- グループワークのレスコンシーズの班は、成果物を三蔵祭で展示、この実施内容を計測自動制御学会中国支部学術講演会で発表することができた。また、ET ロボコンの班は中四国地区大会へ出場し、上位の成績を獲得することができた。

■ 問題点、改善策、後期での対応策

- ここ数年、教養ゼミのグループワークを出発点とし、会発表や学外イベントなども実施している。今回のグループワークは、地方学会での学会発表や、ETロボコン地区大会出場に繋がったが、班を小人数に分けたためグループ間での盛り上がりの差が発生した。
- グループでの作業は学生間の交流を深める狙いがあるが、今回のグループワークは遠隔での実施が多く、学生間交流をはかるという効果を出すことは困難であった。
- 今回の教養ゼミでは、遠隔での講義を中心として進めたため、これまでのノウハウが十分に活用できなかった。特殊な社会的背景があったためだが、リモート講義における初年次教育の最適な教育方法を模索することは今後も課題として注力したい。

工学部 建築学科

■ 担当者氏名

(代表・1年担任) 田辺和康、伊澤康一、酒井要
大島秀明、宮地功、都祭弘幸、梅國章、佐藤圭一、藤原美樹、佐々木伸子、山田明

■ 教養ゼミの目的

建築の初学者に対する入門授業として、「建築」で取り扱うジャンルがデザイン・計画・歴史・環境・構造・構法といった理系から文系にわたる広範な分野を扱うことを知ることを目的としている。

自分が建築学科での学びにおいて、どのジャンルについて取組んでいきたいかを決めていくための第一歩として、各教員の専門性を活かした内容の少人数ゼミナール形式によるグループワークによって、「建築」が取組むジャンルや内容についての理解を深め、建築に対する興味の掘り起こしのキッカケづくりとしていく。

■ 実施内容

授業は、建築への興味と理解を深めていくために、6～7名の学生を全教員がゼミ形式で分担して担当し、第1回～14回までを各ゼミ単位でのグループワークをPBL(Problem-based learning:課題解決型学習)形式で進め、学生自らが課題を探すことから取り組みを始めた。

各ゼミ単位での取り組みにおいて、次の3項目を共通事項としている。

- 1)対象フィールドは、松永を中心とした備後地域(松永・福山・尾道)を対象にする
- 2)設定した「共通テーマ」を基に、各研究室で取組む具体的なリサーチ課題を設定する
- 3)具体的に取組む内容は、各研究室の専門性・特長を生かした視点・内容で設定する

今年は、昨年度の反省から、建築の課題について考えられるテーマとして、「地域の課題を解決する」を共通テーマとして、各研究室の専門性を活かしたテーマを設定して取り組んだ。

最終回は、各ゼミ単位での発表を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症対策から、各ゼミが制作したプレゼン資料をセレッソで公開し、学生間の相互評価と教員による評価を行う形式で実施した。

■ 教養ゼミの成果

グループワークでゼミ毎に取り組んだ成果をポスターセッション形式により発表する際、担当教員による採点の他に学生による相互評価も行った。自ら評価をすることによって、他のゼミのテーマも詳しく知ることができ、発表会に主体的に参加できるという効果があった。

■ 課題

新型コロナウイルス感染症対策の下という異例の事態での実施であったことから、教養ゼミ本来の姿であるゼミ実施が難しい状況であった。また、最終発表をリモート形式で実施せざるを得なかったことから、各ゼミでの取り組みを学生同士で話をする機会を設けられず、発表ゼミの一方的なプレゼンテーションに終わってしまった。

工学部 情報工学科

■ 担当者氏名

(代表)宮崎光二

山之上卓、尾関孝史、金子邦彦、中道上、新谷敏朗、宮崎光二、池岡宏、森田翔太、吉原和明

■ 目的

1年次生に対し、少人数クラスを編成し、初年次教育の一環として、コミュニケーション、ディスカッション、プレゼンテーションなどの能力を伸ばす。あわせて、大学での学び、情報工学科での学びについて詳細を説明し、学生自らが大学でのより良い学びができるよう情報提供と指導を実施する。また、学生は、教養講座を受講し、幅広い学問的視野と教養を身に付ける。

■ 実施内容

本年度は新型コロナウイルスによる授業制限により、例年の実施内容を急遽大幅に変更する必要があった。対面による授業実施は最小限に留め、Cerezo を利用したオンライン授業が中心となった。具体的な実施内容は以下のとおりである。

- 1 回(5/13) 教務・キャリア形成について
- 2 回(5/20) ICTについて(Zoom、インターネット、メールなど)
- 3 回(5/27) 学生生活について
- 4 回(6/3) 教員・研究室紹介
- 5,6 回(6/24,7/1) BYOD 室 ネット環境の整備、面談など
- 7,8 回(7/8,7/15) 資格試験、IT 系のキャリアについて
- 9 回～15 回 各教員による課題に取り組む、Cerezo にてオンライン講義

■ 成果等

教養ゼミを通して、大学生生活の過ごし方や大学施設の利用方法を学んだ。少人数のグループにわかれて Office365 の共同作業を行い、学生同士のコミュニケーションを取るよう努めたが、効果が不十分であることは否めない。多くをオンラインで実施することとなり、教養ゼミ本来の目的を十分に達成できたとは言えず、課題を残すこととなり、今後の学生のケアが必要であると認識している。

工学部 機械システム工学科

■ 担当者氏名

内田 博志

■ ゼミの学生数

5名

■ 実施内容

- 第1回 キャンパスライフの基礎知識
- 第2回 福山大学を知ろう
- 第3回 福山大学を活用しよう
- 第4回 映画から人生を学ぶ(1)
- 第5回 基礎教養ゼミ(1) 大学とは — 大学で何を学ぶか
- 第6回 基礎教養ゼミ(2) 大学とは — 大学生としての自覚と責任
- 第7回 基礎教養ゼミ(3) 企画力とチームワーク1 — 大学祭イベントの企画書を作ろう
- 第8回 基礎教養ゼミ(4) 企画力とチームワーク2 — 大学祭イベントの計画書を作ろう
- 第9回 基礎教養ゼミ(5) 創造力を磨く — 地元自動車研究家講演
- 第10回 映画から人生を学ぶ(2)
- 第11回 映画から人生を学ぶ(3)
- 第12回 コンピュータ制御の基礎(1)
- 第13回 コンピュータ制御の基礎(2)
- 第14回 コンピュータ制御の基礎(3)
- 第15回 特別講義(企業における開発・設計)
- 第16回 工場見学(中止)
- 第17回 教養講座(1)(中止)
- 第18回 教養講座(2)(中止)
- 第19回 教養講座(3)(中止)
- 第20回 教養講座(4)(中止)
- 第21回 教養講座(5)(中止)

■ 教養ゼミの成果等

第1回～第3回では、大学での学び方や大学生生活の送り方など、大学新入生として持つべき心構えや基本知識を学習した。第5回～第9回は学科共通の基礎教養ゼミとして、大学生としての目的意識、責任感、企画・計画力、また地元企業の特徴について学習した。第4回および第10回～第11回は、「映画から人生を学ぶ」というタイトルで、大学生生活や若者の進路に関する映画を鑑賞して、感想を述べあった。第12回～第14回は制御系開発用CAEソフトであるMatlabの入門講座を遠隔授業で実施した。

複合的な要素を含んだ授業内容とすることで、学びに広がりを持たせることができ、初年次教育としての十分な成果が得られたものとする。

■ 問題点、改善策、次年度での対応策

令和2年度はコロナウイルスの影響で教養講座がすべて中止となり、また他の回の授業内容も部分的に変更せざるを得なかった。教養ゼミに限ったことではないが、これからの授業ではこうした場合に柔軟に対応できるよう、対面授業と遠隔授業のいずれでも対応できるよう(かついずれでも授業のクオリティを維持できるよう)、シラバス作成の段階で十分に計画を練っておく必要がある。

工学部 機械システム工学科

■ 担当者氏名

真鍋 圭司

■ ゼミの学生数

5人

■ 実施内容

1. はじめに、自己紹介など
2. 大学生活、単位の取り方、試験など
3. 大学での学習方法、レポート作成方法
4. 大学の施設、勉強方法など
5. 基礎教養ゼミ(1) 大学で何を学ぶか
6. 基礎教養ゼミ(2) 大学とは—大学生としての自覚と責任
7. 基礎教養ゼミ(3) 企画力とチームワーク(1)—大学祭イベントの企画書を作ろう
8. 基礎教養ゼミ(4) 企画力とチームワーク(2)—大学祭イベントの計画書を作ろう
9. 基礎教養ゼミ(5) 創造力を磨く—モノづくりのまち備後に学ぶ
10. 数学に親しもう。関数について考える。変化率、微分
11. 微分の公式を覚えよう。
12. プレゼンテーションの基礎
13. 微分の問題を解き、解き方を説明する
14. 物理と数学がどのように関連しているか考えよう。
15. 特別講義
16. 工場見学会
17. 教養講座(1)
18. 教養講座(2)
19. 教養講座(3)
20. 教養講座(4)
21. 教養講座(5)

■ 教養ゼミの成果等

今年はコロナ禍のなか、遠隔授業が大部分であった。大学生生活を始めるための基本的なことは遠隔で説明できたと思う。5回から9回目までの基礎教養ゼミは、これも遠隔で全員が集まって討論などを行った。数回は対面授業で行ったが、そのときはは数学を題材にして、数学 I で学習している問題を解いて、解き方の発表などを行った。

■ 問題点、改善策、次年度での対応策

コロナのため、学生同士のコミュニケーションは十分ではなかったと思う。遠隔授業の方が学生は出席しやすいと思われるが、1人は欠席が多く、教養ゼミを放棄してしまった。このような学生に対する方法を考えることが課題である。

工学部 機械システム工学科

■ 担当者氏名

坂口 勝次

■ ゼミの学生数

4名

■ 実施内容

- 第1回 オリエンテーションと自己紹介(遠隔授業)
- 第2回 キャンパスライフ(遠隔授業)
- 第3回 スタディスキルズ(遠隔授業)
- 第4回 本と読書について(遠隔授業)
- 第5回 基礎教養ゼミ (1)大学とは ― 大学で何を学ぶか(遠隔授業)
- 第6回 基礎教養ゼミ (2)大学とは ― 大学生としての自覚と責任(遠隔授業)
- 第7回 基礎教養ゼミ (3)企画力とチームワーク1 ― 大学祭イベントの企画書を作ろう(遠隔授業)
- 第8回 基礎教養ゼミ (4)企画力とチームワーク2 ― 大学祭イベントの計画書を作ろう(遠隔授業)
- 第9回 テーマの趣旨説明と設定
- 第10回 情報収集・分析
- 第11回 基礎教養ゼミ (5)創造力を磨く ― モノづくりのまち備後に学ぶ
- 第12回 資料づくり
- 第13回 資料のまとめ(遠隔授業)
- 第14回 プレゼンテーション制作(遠隔授業)
- 第15回 オンライン特別講義「企業での開発・設計」:ダイキョーニシカワ(株) 杉山義孝 講師 (遠隔授業)
- 第16回 工場見学 (中止)
- 第17回 第1回教養講座(中止)
- 第18回 第2回教養講座(中止)
- 第19回 第3回教養講座(中止)
- 第20回 第4回教養講座(中止)
- 第21回 第5回教養講座(中止)

■ 教養ゼミの成果等

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、遠隔授業が多くなり、教養講座はすべて中止となった。

「環境問題の提起 ―循環型社会を目指して―」を統一テーマとし、学生自身が設定した個々のテーマは、ゴミ問題、水質汚染、放射性廃棄物、プラスチックによる環境問題であった。これら個々のテーマの現状、原理・仕組みや対策の取組みについて情報収集・分析・整理した結果をプレゼンテーション用スライドにまとめ、発表のためのセリフを埋め込んだ。これらの学修によって、安心・安全な循環型社会をめざして技術者として社会に貢献する態度を醸成する意味でも、本学科における学修の意義を再認識する機会になったと思われる。

また、大学での学修に関する技能・態度、基礎教養ゼミを通じて大学での学び等の態度を身に付ける取組みのほかに、企業人(技術者)の外部講師による産業界でのモノづくりの現状と技術者の仕事と心構えを知るための「オンライン特別講義」を開催した。これらの取組みが、将来に向けてこれからの学修生活をどのように送るかを具体的に考える機会になったと思われる。

■ 問題点、改善策、次年度での対応策

遠隔授業では、ビデオ会議システムを利用した同時双方向型のディスカッションを実現し、学修効果を高める。

工学部 機械システム工学科

■ 担当者氏名

木村 純壮

■ ゼミの学生数

5名

■ 実施内容

- 第1回 ガイダンス, 授業実施方法説明, 自己紹介原稿作成 (遠隔授業)
- 第2回 スピーチ方法, 大学環境 (遠隔授業)
- 第3回 大学生活について 大学と高校の相違点, 大学生活の送り方の注意 (遠隔授業)
- 第4回 学習方法, 受講の心構え, 授業の聞き方, ノートの取り方, 授業外学修 (遠隔授業)
- 第5回 大学とは—大学で何を学ぶか (遠隔授業)
- 第6回 大学とは—大学生としての自覚と責任 (遠隔授業)
- 第7回 企画力とチームワーク(1)—大学祭イベントの企画書を作ろう (遠隔授業)
- 第8回 企画力とチームワーク(2)—大学祭イベントの計画書を作ろう (遠隔授業)
- 第9回 大学生活と就職, 就職概略スケジュール, 企業情報 (対面授業)
- 第10回 就職活動, 就職試験, SPI適性検査模試実施(理科・物理関係), 解説 (対面授業)
- 第11回 仕事と資格, 機械設計技術者試験3級, 機械技術者関係資格 (対面授業)
- 第12回 特別講義 学外講師(カーエンジニア) (対面授業)
- 第13回 時事問題 調査・整理 (遠隔授業)
- 第14回 高校生活と変わった点 将来計画策定 (遠隔授業)
- 第15回 特別講義「企業におけるモノづくりの方法」(企業講師) (遠隔授業)

■ 教養ゼミの成果等

初年次教育として, 大学生活への適応や注意点, 基礎力の育成と大学生活の目標, 将来計画等をテーマとして取り扱った。第5回から第9回までは, 機械システム工学科1年生クラス全体によるアクティブラーニングを行った。テーマは, 「大学とは」, 「チームによる大学祭イベント企画書の作成」, 「カーエンジニアの人生経験談」。例年は, 毎回の授業において, 説明・問題提起, 考察, 整理, プレゼンテーション, 質疑のプロセスを経るようにより, 学生が自分で考えること, プレゼンテーションやディスカッションの機会が増えることを重視しているが, 今年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け, 11回を遠隔授業として実施したため制限が大きかった。学生は, 入学直後から慣れない遠隔授業を受講せねばならず, かなり負担が重かったと考える。

■ 問題点, 改善策, 次年度での対応策

学生・教員ともに慣れない遠隔授業を実施して, アクティブラーニング等思い通りにできないことが多かった。ただし, ICT, BYOD の活用を進めてきていたので, 遠隔授業の準備・実施は, 比較的円滑に行うことができたと思われる。

工学部 機械システム工学科

■ 担当者氏名

加藤 昌彦

■ ゼミの学生数

5名

■ 実施内容

- 第1回 教養ゼミの説明、自己紹介
- 第2回 初年次教育(大学の施設・設備、大学での授業)
- 第3回 初年次教育(学生生活、卒業後の進路、機械工学の学習、4年間の勉学)
- 第4回 初年次教育(BYOD パソコンによる OFFICE ソフトの活用)
- 第5回 基礎教養ゼミ(1)(大学とは—大学で何を学ぶか)
- 第6回 基礎教養ゼミ(2)(大学とは—大学生としての自覚と責任)
- 第7回 基礎教養ゼミ(3)(企画力とチームワーク(1)—大学祭イベントの企画書を作ろう)
- 第8回 基礎教養ゼミ(4)(企画力とチームワーク(2)—大学祭イベントの企画書を作ろう)
- 第9回 基礎教養ゼミ(5)(想像力を磨く—モノづくりのまち備後に学ぶ)
- 第10回 片持梁の強度試験1 ルール説明およびアイデア醸成
- 第11回 片持梁の強度試験2 梁の試作と評価
- 第12回 片持梁の強度試験3 有限要素法による梁の評価 1
- 第13回 片持梁の強度試験4 有限要素法による梁の評価 1
- 第14回 片持梁の強度試験5 強度評価とまとめ
- 第15回 特別講義
- 第16回 企業見学会
- 第17回 ~~教養講座①~~
- 第18回 ~~教養講座②~~
- 第19回 ~~教養講座③~~
- 第20回 ~~教養講座④~~
- 第21回 ~~教養講座⑤~~

■ 教養ゼミの成果等

第1～4回で、教養ゼミの意義、大学での勉強方法、生活態度、就職のための準備等について説明し、今後の勉学・生活面で進むべき方向を理解させた。第5～9回では、基礎教養ゼミとして大学教育の意味、創造性を醸成させた。第10～14回では、機械工学専門科目の一つである材料力学のイントロ講義として、ケント紙を使ったコンテスト競技型授業を行った。

■ 問題点、改善点、次年度での対応策

オンラインと併用で実施した。第10 - 14回はアクティブ型授業としており学生の学習意欲は高い。BYODを使用した強度計算もオンラインで実施した。

工学部 機械システム工学科

■ 担当者氏名

関根 康史

■ ゼミの学生数

5人

■ 実施内容

1. はじめに,自己紹介など
2. 大学生活, 単位の取り方, 試験など
3. 大学での学習方法やレポートの作成方法について
4. 大学の施設や勉強方法など
5. 安全を考えよう(その 1)高齢ドライバー事故の発生要因について考える(前編)
6. 安全を考えよう(その 2)高齢ドライバー事故の発生要因について考える(後編)
7. 安全を考えよう(その 3)「自動車アセスメント」から安全を考える
8. 安全を考えよう(その 4)衝突事故を起こした大型トラックの乗員救出について考える(前編)
9. 安全を考えよう(その 5)衝突事故を起こした大型トラックの乗員救出について考える(後編)
10. 特別講義
11. 基礎教養ゼミ (1) 大学で何を学ぶか
12. 基礎教養ゼミ (2) 大学生の自覚と責任
13. 基礎教養ゼミ (3) 企画力とチームワーク (1)
14. 基礎教養ゼミ (4) 企画力とチームワーク (2)
15. 基礎教養ゼミ (5) 創造力を磨く
16. 教養講座(1)
17. 教養講座(2)
18. 教養講座(3)
19. 教養講座(4)
20. 教養講座(5)

■ 教養ゼミの成果等

今年度配属された学生 5 名であった。なお、前期における授業については、コロナ禍のため遠隔授業となつてしまった回も少なくなかったが、全員出席率も良く、特に問題は無かった。授業内容については、最近社会的に問題とされている高齢ドライバーに関することや、衝突事故を起こした大型トラックの乗員救出に関する内容等をテーマにし、対面授業となった時期に、実車(ただし、停止状態)を使用した実験を行ったり、模型を製作の上、これを使用した実験も行った。これにより、学生にも、身体を動かすことで、自動車の安全に対してより一層の理解を深めることが出来たと思う。なお、例年実施してきた図書館の見学は中止した。

■ 問題点, 改善策, 次年度での対応策

今年度の教養ゼミについては、欠席もほとんどなく、問題となることは無かった。次年度においても、もし対面で教養ゼミができる時期があれば、座学だけでなく、実験のようなことを実施していきたいと考える。また、図書館の見学も実施したい。

工学部 機械システム工学科

■ 担当者氏名

中東 潤

■ ゼミの学生数

5名

■ 実施内容

- 【第1回】オリエンテーション、自己紹介
- 【第2回】大学生活について(単位の取得、定期試験、大学施設について)
- 【第3回】課外活動のすすめ
- 【第4回】図書館の使いこなし方
- 【第5回】基礎教養ゼミ(1)大学で何をやりたいか話し合ってみよう
- 【第6回】基礎教養ゼミ(2)大学でやりたいことを実現するためのシナリオを作ろう
- 【第7回】基礎教養ゼミ(3)大学祭でやりたいことを話し合ってみよう
- 【第8回】基礎教養ゼミ(4)大学祭りの企画書を作ろう
- 【第9回】基礎教養ゼミ(5)モノづくりのまち備後を学ぶ
- 【第10回】キャリアデザイン
- 【第11回】リサーチの方法(テーマ:学生がだまされる危険について)
- 【第12回】プレゼンテーションの方法、テーマ決定、発表用資料の作成
- 【第13回】口頭発表準備
- 【第14回】プレゼンテーション
- 【第15回】特別講義
- 【第16~20回】教養講座(中止)
- 【第21回】企業見学会(中止)

■ 教養ゼミの成果等

受講生の主な感想は以下の通りである。

- ・大学での過ごし方や、目標を持つことの重要性などがわかりました。また、ほかの生徒の意見も見ることができたので、考えの幅が広がりました。
- ・対面授業を通して、友達ができたので、とてもうれしかったです。
- ・大学生には色々な危険があることがわかりました。行き過ぎた行動をしてしまうと取り返しがつかないことがあります。そうならないように気を付けて行動しようと思いました。
- ・自己紹介での良い自己紹介、悪い自己紹介の例を知れた。実際に何回か後のグループチャットでの話し合いの際、自己紹介をするときに役に立ちました。
- ・大学生と高校生の違い、大学でのレポート作成方法について知ることができました。
- ・改めて、正しい敬語表現や礼儀、作法、マナーなどについて確認することができました。
- ・大学での行事や試験のこと単位のことなどオリエンテーションの内容+ α で知ることができた。
- ・大学で大きく学ぶことや社会にこれから出る上で大学ですべきことなど様々なことについて学びました。

コロナ禍につき教養講座や企業見学会は中止となったが、学生個々で感じたことや得るものがあったと考えられる。

■ 問題点, 改善策, 次年度での対応策

コロナ禍の中で遠隔授業が多かったが、上述のように学生自身はそれなりに学んでくれたものと考えている。引き続き学生にとって有意義な教養ゼミを行っていきたいと思う。

工学部 機械システム工学科

■ 担当者氏名

小林 正明

■ ゼミの学生数

4 名

■ 実施内容

“モノづくりを楽しもう！”というテーマで実際にモノづくりを行いながらレポートの作成方法、プレゼンテーション方法などを学習した。

- 1) オリエンテーションと自己紹介
- 2) 大学生活について
- 3) 大学での勉強方法など
- 4) モノづくりについて
- 5) 基礎教養ゼミ(1) 大学とは 大学で何を学ぶか
- 6) 基礎教養ゼミ(2) 大学とは 大学生としての自覚と責任
- 7) 基礎教養ゼミ(3) 企画力とチームワーク(1) 大学祭イベントの企画を作ろう
- 8) 基礎教養ゼミ(4) 企画力とチームワーク(2) 大学祭イベントの計画書を作ろう
- 9) ペーパーパラシュートの製作(1) 検討・制作
- 10) ペーパーパラシュートの製作(2) レポート作成・発表
- 11) 紙動力自動車の製作(1) 検討・制作
- 12) 基礎教養ゼミ(5) 外部講師による特別講演
- 13) 紙動力自動車の製作(2) 制作
- 14) 紙動力自動車の製作(3) レポート作成・発表
- 15) 特別講義 企業講師による特別講演 (外部講師)
- 16)
- 17)
- 18)
- 19)
- 20)
- 21)

■ 教養ゼミの成果等

本年度の前半は遠隔授業での実施となった。前半は、Zoom を用いて大学での勉強内容だけでなく学生生活や就職活動などについても説明を行った。Zoom を用いて SGD 形式で実施したことにより学生通しのコミュニケーションをとることができより深く理解ができたものと思われる。基礎教養ゼミもセレクションを用いたりリモート形式で実施した。後半は、対面形式での実施となった。簡単なモノづくり教材を用いてモノづくりの大切さ、レポートの作成方法、プレゼンテーションの方法などを学習した。受講生は教養ゼミの時間だけでなく講義の空き時間などを使って各テーマに取り組んでいた。モノづくりに挑戦することで創造する楽しさや達成感を得ることができたと思われる。本年度は、教養講座の開催がなかったが、受講生はこれからの大学生活にとって大変有意義な機会であったと思われる。

■ 問題点, 改善策, 次年度での対応策

前半の遠隔授業は、学生間でのコミュニケーションをとるためZoom形式で実施した。Zoom形式での実施は対面授業と違い戸惑うことが多かった。Zoomでのコミュニケーションの取り方などの課題が残った。後半の対面形式での実施では、積極的に取り組んでいる学生とそうでない学生との取り組み方が異なっていた。SGD を積極的に取り入れることによって学生の学修のモチベーションの向上につながった。

生命工学部 生物工学科

■ 担当者氏名

(代表)松崎浩明

山本覚、久富泰資、岩本博行、佐藤淳

■ 生物工学科教育プログラムにおける教養ゼミの位置付け

生物工学科では、学習意欲を高め、目標を設定し達成することを目的として、演習科目や実験科目を教育プログラムに多く取り入れている。本学科カリキュラムにおいて教養ゼミは、本学・本学科の教育の特徴の理解を深めさせ、一般教養を高めながらさらに幅広く事象に対する興味を喚起する科目として位置付けて開設している。さらに、初年次教育として、受講生が高校から大学の学修・生活へスムーズに移行し、またセミナーや実体験を通して受講生同士及び受講生と教員間で密にコミュニケーションを取ることで教員や友人との信頼関係を構築し、協調性や自主性を育成することを目指す。コミュニケーション力を育成するためにプレゼンテーションやディスカッションなどを積極的に取り入れて実施している。

■ 実施内容

前期

第1回 教養ゼミガイダンス、オリエンテーションの補足

大学における履修と学修 -「大学での履修」や「生徒と学生の違い」を考える-

第2回 学生生活について -どのような学生生活を送るかを考える、自己管理術、年間目標の作成-

第3回 大学での学習に向けて -学修スキル(講義の聴き方、ノートの取り方)を学ぶ-

第4回 大学での学習に向けて -書物、新聞、インターネット、および学術雑誌による情報収集を学ぶ-

第5回 大学での学習に向けて -学修スキル(リーディング)を学ぶ-

第6回 バイオの歴史 -古典的バイオについて知る-

第7回 バイオの歴史 -現代バイオについて知る-

第8回 バイオの歴史 -ニューバイオについて知る-

第9回 最近のトピックス -最近のトピックスの情報を収集し、内容とコメントをまとめる-

第10回 最近のトピックス -小論文作成法を学び、最近のトピックスの原稿を修正-

第11回 生物工学科における研究 -大学ホームページ等での研究の調査-

第12回 生物工学科における研究 -研究紹介の発表原稿の作成-

第13回 大学祭学科展示の企画 -過去の展示企画の紹介、過去の展示企画に対する意見・感想-

第14回 大学祭学科展示の企画 -展示企画を考える-

第15回 前期の学修・生活を振り返って -前期の総括を行い、後期にどのようにするか考える-

後期

第16回 学生生活について -年間目標の達成に向けた自己点検-

第17回 研究調査発表の準備 -大学祭の展示の代替となる研究調査発表の準備(1)-

第18回 研究調査発表の準備 -大学祭の展示の代替となる研究調査発表の準備(2)-

第19回 研究調査発表 -大学祭の展示の代替となる研究調査発表-

第20回 研究調査発表の総括 -研究調査発表の総括、発表改善のグループディスカッション、報告-

第21回 最近のトピックス -最近のトピックスの情報を収集し、内容とコメントをまとめる-

第22回 学修スキル -実験ノートの作成法を学ぶ-

第23回 学修スキル -実験データの整理法を学ぶ-

第24回 学修スキル -実験レポートの作成法を学ぶ-

- 第 25 回 植物の栽培 -ワインプロジェクトの概説-
- 第 26 回 キャリア設計 -卒業後の進路の可能性について知る、挨拶、マナー、礼儀を知る--
- 第 27 回 キャリア設計 -資格取得やインターンシップについて知る-
- 第 28 回 ニューバイオを知る -遺伝子検査の今-
- 第 29 回 2年次の学修に向けて -将来の夢を達成するための学修計画を立てる-
- 第 30 回 1年次の学修・生活の総括 -学修・生活を総括し、どんな教養を身に付けたか考える-

■ 成果について

- (1)遠隔授業が多かったが、セレッソやゼルコバを通して、また対面授業の時は直接、教員が受講生とできる限り緊密なコミュニケーションを図りながら、新入生オリエンテーションの補足、「大学での履修」、「生徒と学生の違い」、「学修スキル」の解説、大学における学生生活の指導を行うことで、受講生が高校から大学の学修・生活にスムーズに移行でき、また学修意欲を高めることができた。
- (2)年間目標を設定することで充実した生活を送れ、目標を達成することで自己を成長させることができた学生がある程度いると思われる。新型コロナウイルス感染症の流行のため、充実した生活や目標達成が困難であった学生もいた。
- (3)古典的バイオと現代バイオを紹介する講義の受講や生物工学科における研究の調査によって、生物工学に対する興味が増し、学修意欲が向上した。また、最近のトピックスの情報を新聞、テレビ、インターネットのホームページなどから収集する方法と情報の整理方法を学んだ。実際に情報を収集して、内容を要約し、トピックスに対する自身の意見を述べ、幅広い教養を身に付けるためのスキルを修得できたと思われる。最近のトピックスについては何回か課題を提出することで効果があったと思われる。
- (4)講義の聴き方、ノートの取り方、リーディング、実験ノート作成、実験データ整理、レポート作成を指導することで、学修スキルとこれらを行う習慣を身に付けることができた。
- (5)生物工学科では、新型コロナウイルス感染症の感染予防のため大学祭での学科展示は中止とした。1年生は、代替として教養ゼミで研究調査発表を実施した。これにより、協調性、自主性、コミュニケーション力、プレゼンテーション力を育成し、また教員や友人との信頼関係を構築できた。
- (6)挨拶、マナー、礼儀を幾らか醸成することができた。
- (7)卒業後の進路や将来の夢について考え、これらの実現に向けて、キャリア設計を検討し、2年次の学修計画を立てた。

■ 次年度への課題

- (1)アクティブラーニングとして、大学祭の展示発表を実施する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、実施できなかった。協調性、自主性、コミュニケーション力などを育成する機会が減った。
- (2)新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、遠隔授業が多く、学生と直接コミュニケーションを取る機会が減った。

生命工学部 生命栄養科学科

■ 担当者氏名

(代表)菊田安至

田中信一郎、山本英二、井ノ内直良、久保田みどり、石井香代子、西 彰子、村上泰子、中崎千尋

■ ゼミ数, ゼミの学生数

学生数:32 ゼミの学生:5~6名 (前期:クラス全体と少人数制ゼミを組合わせて実施)

■ 前期実施内容

- 第1回:生命栄養科学科入門1 》遠隔・学科のカリキュラムを知る(担任:西、吉田、井ノ内(教務委員))
- 第2回:生命栄養科学科入門2 》遠隔・大学生活を組み立てる(学生生活指導、学科ルールなど)(担任)
- 第3回:幅広い教養の修得 》遠隔・第1回教養講座 講師:内田伸子氏 /中止※
- 第4回:学科の教員・学生を知る》遠隔(菊田)
- 第5回:管理栄養士のキャリアプラン1 》遠隔・目指せ!管理栄養士資格取得(石井)
- 第6回:学修スキルの修得1 》遠隔・大学の講義とノートの取り方(村上、田中ほか)
- 第7回:学修スキルの修得2 》遠隔・読解力を身につけよう!(村上、田中ほか)
- 第8回:大学祭を考える 》クラスでつながること(久保田、吉田)
- 第9回:大学祭を考える 》“祭り”から学べ!(久保田、吉田)
- 第10回:大学の施設を知る:図書館、保健管理センター訪問
- 第11回:地域との協働 校外活動・学生の社会参加① /中止※
- 第12回:幅広い教養の修得2 》第2回教養講座 講師:穴戸仙助氏 /中止※
- 第13回:社会人マナーの醸成1 》遠隔・環境に応じた対応力を身につけるには?
- 第14回:社会人マナーの醸成2 》遠隔・効果的に意見交換をする為には?
- 第15回:学修スキルの修得3 》遠隔・自分の考えを整理する力(論理的思考を身につけよう)(村上、田中)

■ 後期実施内容

- 第16回:生命栄養科学科入門3 》国試模試のリフレクション、後期授業開始にあたって(西、吉田、井ノ内)
 - 第17回:大学祭に取り組む① 》大学での発表テーマの検討、協働の体験(久保田、吉田)
 - 第18回: ” ② 》大学祭は遠隔で実施されることになり、ライブ及びオンデマンドで配信
 - 第19回: ” ③ 》※配信用ビデオの作成(内容、ビデオ出演など)
 - 第20回: ” ④ 》 ”
 - 第21回: ” ⑤ 》配信当日担当など
 - 第22回:大学祭参加のリフレクション 》自分にできたこと、できなかったことは何か?(久保田、吉田)
 - 第23回:幅広い教養の修得 》第3回教養講座 倉橋彩子氏 /中止※
 - 第24回:管理栄養士のキャリアプラン2 》チーム作業に必要な栄養専門職対人スキル(田中、村上)
 - 第25回:管理栄養士のキャリアプラン3 》目指す職場に必要な栄養専門職スキル(村上、田中)
 - 第26回:管理栄養士のキャリアプラン4 》キャリアデザインⅠの学修効果の再認識(田中、村上)
 - 第27回:臨地実習とは? 》遠隔・オンデマンド/臨地実習出発式・臨地実習発表会の聴講(西、吉田)
 - 第28回:幅広い教養の修得 》第4回教養講座 講師:山 泰幸氏 /中止※
 - 第29回:幅広い教養の修得 》第5回教養講座 講師:山田 満氏 /中止※
 - 第30回:卒業研究発表会の聴講 》遠隔・オンデマンド/研究の面白さを覗いてみよう!(西、吉田)
- ※/中止=コロナウイルス感染拡大に伴い中止となった(多数が密集する場所での講義は不可)

■ 教養ゼミの成果

令和2(2020)年は、コロナウイルス感染症対応のため、授業が初めて遠隔授業(セレッツ活用)となり、通常の教養ゼミの実施が困難となった。前期において、大学生活への導入など遠隔授業で進めながら、順番の入

替等も実施し、授業の受け方やノートの取り方など、実践的な部分も指導した。対面での授業と遠隔での授業とを組合わせて実施した。

後期は、大学祭を機会にコミュニケーション能力の向上を目指す予定であったが、大学祭が遠隔となり、オンラインでの動画配信や情報発信の素材作成をすることで学生指導に替えた。可能な限り、対面で授業も行ったが高学年の発表への参加は、動画等の情報を視聴する形式にして、学修の継続を維持した。

■ 問題点, 改善点, 次年度に向けた課題

新型コロナウイルス感染症拡大による大幅な授業の変更を余儀なくされた 1 年間であった。日本全体が初めての経験であり、大学での本格的な遠隔授業の導入・実施で、新入生にとって不安の大きいものであったと推察する。学生個々の学修への取り組みやモチベーションの維持など、しっかりと確認・指導、さらに寄り添う姿勢も重要であると認識する。

管理栄養士の学修課程の進行に合わせた検証として、国試問題に触れる機会を作る等が考えられる。遠隔授業の充実、対面授業の最大限の活用を検討し、学力向上と共に学力不足の学生に対する担任からの支援を充実させる。例年にも増して、担任との面談など直接的なコミュニケーションの機会を作る。

■ 担当者氏名

(代表) 三輪泰彦

■ ゼミ数, ゼミの学生数

ゼミ数:14

ゼミの学生数:8-9名

全学生数:125名

■ 前期実施内容

- 1)全体ガイダンス:教養ゼミの内容説明、履修、授業、試験、学習支援等の補足説明、研究者(学生)求められる研究倫理の説明
- 2)自己紹介(自己紹介シートおよび自己紹介発表原稿の作成)
- 3)個人面談-学生生活、欠席調査など
- 4)教務関係、学生関係の指導など
- 5)前期定期試験への心構え

■ 後期実施内容

- 1)個人面談-前期の履修状況、学生生活、欠席調査など
- 2)教務関係について
- 3)学芸員資格及びインターンシップについて
- 4)食品衛生管理者・食品衛生監視員の資格及びその進路先について
- 5)生物分類技能検定の資格について
- 6)環境調査会社及び水産試験場の仕事の内容について
- 7)各専門コースの研究内容について
- 8)各専門コースの進路先(民間企業、公務員、研究機関など)について
- 9)後期定期試験への心構え

■ 教養ゼミの成果等

- (1)新型コロナウイルス感染拡大の中で、前期・後期を通じて機会が非常に少なかったが、自己紹介や個人面談などを少人数体制で行ったので学生と教員、学生同士で、ある程度コミュニケーションをとることができた。
- (2)教養ゼミにおいて本学科で何を学べるか、本学科でしか学べない事は何か、また本学科で学ぶことで将来どういう仕事につくことを目指せるか等について学生に明確に伝え、学生のモチベーションを高めるよう、対面授業を通じて行った。
具体的には後期の教養ゼミでコロナ禍の中において1学年125名で1つの講義室で対面授業を実施することができなかったことから1学年を2つのクラスに分けて、各教員が研究内容、各コースで取得できる資格(教員免許、学芸員、食品衛生管理者及び食品衛生監視員、生物分類技能検定など)、様々な分野の進路先(公務員、専門的な民間企業、研究機関、大学院など)をそれぞれ紹介した。
これらの内容を受講した結果、新入生が3年次において、4つのコースでどのような専門的な内容を学びたいのか、どのような資格を取得したいのか、将来どのような進路先で活躍したいか、などの情報を得ることができた。

■ 問題点, 改善点, 対応策

- (1) 今年度は新型コロナウイルス感染拡大による感染リスクのため、例年の「大学祭の学科の展示・企画」について各グループで提案された企画案について、1 学年(125 名)を介してプレゼンテーションや全体討議を行うことができなかった。次年度も学科全体で新型コロナウイルスの感染防止対策と学生の健康管理を徹底して行い、早く本来のキャンパスライフを戻していきたい。
- (2) コロナ禍の中で学生生活や教務(履修方法、欠席調査、ゼルコバやセレッソの操作方法、定期試験への対応など)の情報を学生に十分に周知させ、サポートすることができなかった。特に、ゼルコバやセレッソの操作方法の ICT サービスのサポートができなかった点を踏まえて、次年度は「オリエンテーション」や「教養ゼミ」を通じての新入生が遠隔授業を円滑に受けられるようにゼルコバやセレッソの操作方法の指導を徹底する。また、タイムリーに担任や授業担当者が新生にゼルコバやセレッソを活用して連絡ができるよう徹底する。
- (3) コロナ禍の中で教養ゼミを対面授業と遠隔授業のハイブリッドで実施したが、学生同士のコミュニケーションが少なかったせいか、友人をつくる機会が減った。今後はコロナ禍においても可能限り、対面授業を増やして、学生同士が親睦を深めることのできるイベントを企画していきたい。
- (4) コロナ禍において対面で面談する機会が少なかったり、遠隔授業のみで実家に帰省していたりすることから、今後は「Zoom」などを活用して個人面談ができるように改善していきたい。
- (5) 教養ゼミの時間割調整が難しい。本学科では学生実験や会議、出張等によって一部の教員はスケジュール合わせができないことがある。また、因島キャンパス専任の教員は、因島キャンパスから本学に移動するため、教員の負担が非常に大きい。

薬学部

■ 担当者氏名

(代表)山下純

(担当)井上裕文、岡村信幸、長崎信浩、広瀬 雅一(薬学入門担当)

本屋敷 敏雄、道原 明宏、高山 健人、前田 頼伸、佐藤 雄己、猿橋 裕子(クラス担任)

■ ゼミ数, ゼミの学生数

新入生全員に対し、薬学入門Ⅰならびに教養講座において教養ゼミを実施した。

■ 実施内容

1 薬学入門Ⅰ(担当責任者:山下純)

学年を3つのクラスに分け、各授業ではクラス単位でスモールグループディスカッション(SGD)を行い、薬学入門担当教員(2名)ならびにクラス担任(2名)がチューターとして指導を行った。

※日程・授業概要は別紙参照

2 教養講座(担当責任者:山下純)

「ブンナビ薬学特別講座 2020 Web 版福山大学薬学部 WEB 配信講座」の第2部(1時間20分)を視聴して、福山大学薬学部の卒業生(2019年卒2名、2009年院卒1名)が話した内容を、提示された表に書き込んで整理した。また、それをふまえて学生自身の考え、感想(200字以上)を書いて完成しセレッソから提出した。クラス担任が指導を行った。

■ 教養ゼミの成果等

学生が主体となって能動的に学習・情報共有、さらに体験することによって『気づきの学習』を実践することで、学生の行動変容のためのきっかけ作りになる。上記の学習により、次の事項について向上ならびに醸成を得たと考える。

- ・学生－教員間ならびに学生同士のコミュニケーションの活性化
- ・薬学生としてのモチベーションの醸成
- ・情報の収集と処理ならびにプレゼンテーションなどの能力の向上
- ・能動学習のための動機づけ
- ・問題解決能力の向上
- ・挨拶、マナー等の社会性の涵養

■ 問題点, 改善策等

- ・学生のアンケート調査によって、改善を行っている。

令和2年度 薬学入門 I

実施日	5月11日(月)	13日(水)	18日(月)	20日(水)	25日(月)	27日(水)	6月1日(月)	3日(水)	8日(月)	10日(水)	15日(月)	17日(水)
授業形式	オンデマンド授業	オンデマンド授業	オンデマンド授業	オンデマンド授業	オンデマンド授業	オンデマンド授業	オンデマンド授業	オンデマンド授業	オンデマンド授業	オンデマンド授業	オンデマンド授業	オンデマンド授業
3限	全クラス	全クラス	全クラス	全クラス	全クラス	全クラス	全クラス	全クラス	全クラス	全クラス	全クラス	全クラス
授業概要	今心にあること(レポート課題)	今心にあること(レポート課題)	薬とその適正使用(レポート課題)	薬とその適正使用(レポート課題)	薬剤師の活動分野(レポート課題)	薬剤師の活動分野(レポート課題)	病院における薬剤師の役割(レポート課題)	病院における薬剤師の役割(レポート課題)	保険調剤薬局における薬剤師の役割(レポート課題)	保険調剤薬局における薬剤師の役割(レポート課題)	生と死にかかわる倫理的問題(レポート課題)	生と死にかかわる倫理的問題(レポート課題)
												12

実施日	6月22日(月)	6月24日(水)	29日(月)	7月1日(水)	7月6日(月)	13日(月)	7月15日(水)	27日(月)	8月3日(月)	8月5日(水)	9月25日(金)
授業形式	対面授業 34号館2階 研修室1&2	Zoom会議システムによるオンライン授業	対面授業 34号館2階 研修室1&2	対面授業 34号館2階 研修室1&2	対面授業 20号館2階						
3限	P1とP2A	P2BとP3	P1とP2A	P2BとP3	菅 P1とP2A	P1とP2A	P2BとP3	山中 全クラス	P1とP2A	P2BとP3	全クラス
4限	P1とP2A	P2BとP3	P1とP2A	P2BとP3	菅 P2BとP3	P1とP2A	P2BとP3	山中 全クラス	P1とP2A	P2BとP3	
5限											
授業概要	今心にあること(SGD)	今心にあること(SGD)	薬とその適正使用(SGD)	薬とその適正使用(SGD)	ヒューマニズム・コミュニケーション(SGD)	薬剤師の活動分野(SGD)	薬剤師の活動分野(SGD)	マナー・コミュニケーション・薬剤師について(SGD)	病院ならびに保険調剤薬局における薬剤師の役割(SGD)	病院ならびに保険調剤薬局における薬剤師の役割(SGD)	病院・薬局への質問内容の発表と実務経験のある教員からのフィードバック
											13

大学教育センター